

中華世界における石刻物の製作と展開 —墓誌を中心として—

The production and its development of stone carvings in the Sinitic world:
with a focus on epitaphs

武田和哉

TAKEDA, Kazuya

大谷大学社会学部

(Faculty of Sociology, Otani University)

Abstract

In the Sinitic world, a culture existed in which epitaphs carvings, known as epitaphs, were buried and placed in the tombs of powerful people, aristocrats and other influential figures. When epitaphs are unearthed, it is possible to determine the date of construction of the grave and the person buried, so they have been recognized as extremely important inhumation artifacts in the fields of history and archaeology.

Epitaphs are valuable historical documents in the sense that the text is engraved in stone, and they are also important as an information medium in that the information described at the time is directly transmitted to the present.

Epitaphs are believed to have originated in the Han [漢] dynasty, and at first the family name and position of the deceased were simply written on the stone. With the passage of time, they were buried and placed in the tomb and detailed descriptions of the deceased's achievements during their lifetime were added at the end, along with an 'inscription' in rhyme, which was a lament for the deceased.

In addition, the shape and style of the tombstones became moulded around the Bei Wei [北魏] dynasty. During the Tang [唐] dynasty, the culture of tombstones flourished and their size became huge and culturally established. During the Khitan [契丹] (Liao [遼]) dynasty, there was a clear correlation between the status of the deceased and the size of the tombstones, and epitaphs with Khitan scripts were limited to a small number of the deceased, such as relatives of the emperor.

Epitaphs are buried in sealed graves. The question therefore remains as to whom the text of the epitaph is addressed. The author considered that, as well as serving the purpose of mourning the deceased, the epitaphs also served the purpose of self-awareness of the person conducting the funeral rites themselves. The Bei Wei, Tang and Kkitan (Liao) dynasties, during which the culture of tombstones developed, corresponded to the period in the Sinitic world when the surrounding ethnic groups were entering society, and the author considered the possibility that this may have been related to this historical background.

要旨

中華世界においては、権力者や貴族など有力者の墓に、墓誌と呼ばれる石刻物を埋納する文化が存在した。墓誌が出土すると、被葬者や墓の築造年代の特定が可能となるので、歴史学・考古学分野においては極めて重要な副葬品と認識されてきた。

墓誌は石に文字を刻むという意味で貴重な史料であり、当時の記載情報が直接現在に伝えられる情報媒体としても重要な存在である。

墓誌の起源は漢代とされ、当初は被葬者の姓名や生前の職位を石材に簡略に記していた。時代の経過とともに、墓中に埋納される形態となり、生前の事績を詳細に記し、末尾には故人を哀悼する韻文「銘」も付されるようになった。また、墓誌の形状や文体は北魏時代頃には定型化した。唐時代には墓誌文化は盛行して、大きさも巨大化し、文化的に定着した。契丹（遼）時代には、被葬者の地位と墓誌の大きさには明確な相関関係が見られ、また契丹文字を記した墓誌は、皇帝の親族などのごく一部の被葬者に限られるなどの特徴があった。

墓誌は封印された墓の中に埋納される。そのため、この墓誌の文とはいったい誰に向けて編まれた内容であるのか、という疑問は残る。筆者は、被葬者の哀悼という目的とともに、葬送者自身の自己認識のための目的も想定した。そもそも、墓誌の文化が進展した北魏・唐・契丹（遼）時代は、中華世界においては周辺の諸民族が社会に進出する時代に該当しており、そうした時代的背景と関係がある可能性を考察した。

1. はじめに

中華世界においては、権力者や貴族など有力者の墓に、墓誌と呼ばれる石刻物が埋納する文化が存在した。時代によってやや異なるものの、墓誌には被葬者の姓名や生前の職位、事績などが記されている。もし墓が何らかの形で見つかった場合、墓誌が出土することによって、被葬者や墓の築造年代の特定が可能となることから、研究面で大きく進展に寄与するという資料性も有している。よって、歴史学・考古学分野においては貴金属や陶磁器などに代表されるような副葬品とならんで極めて重要な遺物と認識されてきた。

墓誌の起源は漢代にあるとされ、当初は被葬者の姓名や生前の職位を石材に簡略に記した程度であった。その後時代の経過とともに、墓中に埋納される形態となって、生前の事績などが詳細に記したり、末尾には故人を哀悼する韻文「銘」も付されるようになっていく。それに応じて、墓誌の大きさも次第に巨大化していくとともに、形状についても定型化し、また石材には各種の装飾もなされるようになっていった。

さて、小文ではその墓誌の起源や展開の経過をた

どりつつ、研究の概況やその所見を踏まえて、筆者個人の想定や推測による見解をまとめて、末尾で提示することとしたい。

2. 墓に置かれる石刻物—その起源と展開—

2-1. 墓と石

日本も含めて、世界の各地には古代において有力者や為政者が巨大な陵墓に葬られる事例は多く存在している。そして、その陵墓を構築する際に、石は強度や耐久性がある資材として頻用されてきた。

石は、その成因によって硬・軟各種の石材が存在している。特に、古代においては石材加工の技術が未熟であったために、寸法の決まった切り出し・成形や、彫刻などの精巧な加工が要求される場合には、比較的軟質で扱いやすい堆積岩系の石材が用いられる傾向がみられる。

さらに、石はその産地によっては様々な材質・形状・色の石材が存在することで、これらの特徴が社会文化における様々な嗜好なども結びつき、特定の産地の石材が好まれてブランド化していく現象も、後世にはみられることではある。

さて本題についてであるが、中国において、石は

陵墓を構築するための資材として使用される場合が大半であった。その後、窯業の技術が敷衍化していき、塼（レンガ）の生産が一般化されるに従い、構築資材の大半はこの塼が利用されていくようになる。しかしながら、一部には依然として石が用いられるものも存在した。その代表例が本文で扱う墓誌である。

2-2. 墓誌の起源と展開

墓誌の起源については諸説あるが、現物が確認されているものとしては後漢時代の事例が知られるので、概ね漢代の頃とする説が有力とみられる（中田，1975）。この時期の名称としては「墓記」が主流であったとされ、長方形の石材に、被葬者の姓名や出自・親族関係、生前の職位などが記されていて、しかも墓の外部に置くものであった。

ところで、後漢末の有力者であり、次代の三国時代の魏の基礎を築いた曹操の墓が2009年に河南省で発見されている（祝，2010；劉，2010）。ただし、当初は被葬者がかの著名な曹操であるとはすぐには判明しなかったようである。墓からは墓記でなく、「魏武王」との刻字がある石材が墓室内において数点のみ出土したことが最終的な決め手になった。

曹操は、後漢末に自身が丞相として施政を担当した際には葬送の奢侈化防止を目的として墓外部における立碑すなわち墓記の禁止令を出している¹、恐らく自身の墓もそれに沿ったものであろうか。

また曹操の出した政令は、それ以降の時代においてどの程度の効力があったのかどうかは不明であるが、実際には墓の外に碑を立てるという様態は次第に廃れ、墓中に石刻物を埋納する形態が主流になっていくことになる。いずれにしても、被葬者の名を刻んだ石材が依然として葬送に用いられ続けた点は注目すべきである。

さらに晋代になると、発見された墓誌の数は増える（中田，1975）。この時期の特徴としては、名称

はまだ「墓誌」と定着はしていないものの、概ね後世における墓誌の文章構成や体裁が整ってきている点である。晋が滅亡した後は、中華世界は南北朝の分裂期に入るが、墓誌は主に北魏などの北朝において盛んとなり、その後の隋・唐においてさらに盛行することとなる。

2-3. 墓誌の構造と形状

墓誌の石材の形は、概ね北朝期には定まってきている（中田，1975）。すなわち、その構造は蓋と碑身のふたつからなり、基本的には方形の石材を重ね合わせて置く形態である。上に置く蓋は台形状に上面をすばめる形になっていて、その上面の中央には墓誌の題を大きな字で彫ることが多い。また、蓋の下になる碑身は、基本的には方形のまま、蓋に接する上面に、墓誌の本文が縦書きで彫られる（第1図）。また、時代が下るにつれて、石材には様々な装飾も併せて彫られるようになる。

墓誌の大きさは、北魏の頃は50～80cm程度が主流であったとされるが（中田，1975）、唐代には100cmを超えるものが出現してくる。ただし現段階においては、唐代の墓誌には被葬者の生前の政治的地位（官職や位階）と墓誌の大きさに関して、顕著



第1図 墓誌の形状（遼寧省博物館にて2007年筆者撮影）

契丹（遼）時代の皇帝の墓誌（哀冊）、それぞれ奥に立てかけてあるのが蓋、手前においてあるのが碑身の各石。本来は碑身の上に蓋を合わせて載せる。碑身の上面には刻まれた文字があり、蓋の上部には墓誌の題が記される。なお、この墓誌は彫られた文字が見えやすいよう表面に拓本を貼ったまま展示しているため一見して黒く見えるが、これは拓本の墨の色である。

1 曹操による立碑禁止令については、やや時代が下り、南北朝時代の宋の歴史を記した『宋書』（488年成立）に見える。『宋書』巻十五「礼志二」「漢以後、天下死を送ること奢靡にして、多くは石室・石獸・碑銘等の物を作す。建安十（205）年、魏の武帝天下の雕弊を以て、令を下して厚く葬ることを得ず、又た碑を立つるを禁ず。」（漢以後、天下送死奢靡、多作石室石獸碑銘等物。建安十年、魏武帝以天下雕弊、下令不得厚葬，又禁立碑。）

第1表 契丹（遼）時代の墓誌に関する被葬者の生前の地位と墓誌の石の大きさに関する一覧表（武田，2012より引用）

	被葬者	墓誌の一边の寸法	例
I	皇帝	130～135cm程度	聖宗皇帝・道宗皇帝
II	皇后	125～130cm程度	聖宗仁徳皇后・聖宗欽愛皇后・道宗宣懿皇后
III	皇太叔と妃	120cm前後	義和仁寿皇太叔祖・同妃
IV	皇親・有功の皇族とその妃、国舅族の有力者	100～110cm前後	例：耶律羽之〔渤海国相〕、耶律宗政〔興宗弟〕、耶律宗允〔興宗弟〕、耶律仁先〔于越〕・耶律弘世〔道宗弟〕と同妃、蕭和妻耶律氏〔聖宗皇帝姉・聖宗欽愛皇后母〕、蕭義〔天祚妃父〕など
V	宗室・国舅族の構成員	75～100cm程度	陳国公主〔聖宗皇帝姪〕、耶律弘用〔興宗皇帝甥〕、耶律元寧〔耶律羽之孫〕など
VI	皇族・他部の有力者	75cm程度より以下	耶律道清〔耶律羽之曾孫〕、蕭孝恭〔楮特部・南府宰相家系〕、蕭孝資〔楮特部・南府宰相家系〕、耶律元寧〔于越曷魯孫か〕など

な相関関係は見出しづらいとする認識が、現時点では専門家の中では主流である。

さらに8世紀半ばには安祿山の反乱が起き、それ以降の唐の国内は事実上各地に藩鎮勢力が群雄割拠するような状況となり、唐皇室の権威は衰退していった。こうした世相を背景としてか、有力藩鎮の首領人物の中には一边が200cm近くに及ぶ巨大かつ特殊な墓誌を製作した事例が発見されている（陳，1984）。

唐の滅亡後、中華世界は五代十国の分裂期を経て北宋が成立するとともに、北方には契丹（遼）が唐の滅亡後から既に成立しており、新たな南北朝時代ともいべき多国間の国際社会となっていく。契丹（遼）は北方遊牧民が主導して成立した王朝ではあったが、唐の墓葬制度に大きな影響を受けて、皇族や貴族層では中華的地下墓を構築し墓誌を埋納するという葬送文化が継続していく。

筆者はこれまでに契丹（遼）の墓誌について多く実見してきた経験を有するが、契丹（遼）時代においては、唐代とはいささか異なり、被葬者の身分・官職位と墓誌の大きさや形態にはかなり厳密な相関関係がみられる（第1表；武田，2012）。

しかし、その後は墓誌を埋納する葬送形態は徐々に衰退していき、完全に消失する訳ではないが、一時の頃のような流行はなくなっていくようになる。

3. 墓誌の史料的価値 —契丹（遼）時代の事例を中心に—

3-1. 墓誌の史料的価値

前項で述べたように、墓誌には被葬者の姓名や親族関係、そして生前の事績が記されていることが多く、碑文などの他の石刻史料とともに、出土文字史

料としての価値がある。

中国では、古来から数多くの王朝が興亡し交替してきたが、後代の王朝が前代の王朝の歴史書を編纂する行為が、その政権を受け継いだ正統性の誇示にもなるということで、結果として正史（あるいは二十四史とも呼ぶ）が成立してきた。しかしながら、前代王朝の史書の編纂の動機が、後継王朝の政治的な目的による進められているという点から、たとえ正史であると言えども、その内容は史料批判という手続きを経た上での研究や解釈が行われるべきであることは言を俟たない。史料批判とは、その記述の信憑性について、他の史料を参照するなどして確認をしていく、必要不可欠な作業である。

ただし、中には正史以外には有力な参照史料がない時代・地域も当然にして多く存在する。そのため、その参照史料の役割を代替する存在として、こうした出土文字史料は貴重である。さらには、正史が扱ってこなかった極めてローカルな事案、有力者の出自や親族関係が明確となったり、被葬者に対する心情などが垣間見られるという点で、石刻史料、とりわけ墓誌の史料的価値は重要である。

3-2. 契丹（遼）時代の墓誌

出土文字史料が研究において重要な鍵を握っている研究フィールドの事例として、この契丹（遼）時代が挙げられる。契丹（遼）は、唐滅亡後に、ユーラシア東方世界の北部に成立した国家であり、遊牧民族である契丹族が主導して建設した。成立後には長城以南で伝統的に中華の一部であった燕雲十六州を得て、治下には契丹族を大きく超える漢人が居たと推定されている（韓，2006）。支配者であるマイノリティの契丹族と被支配者であるが人口的には多数の漢族からなる国家で、その統治方法は双方の固

有の政治システムが反映した南北二元官制であった。

現在までに発見されている当時の石刻史料は、ほとんどが漢語で書かれたものである。これは、単純に話者である漢人が多かったというだけでなく、当時の社会においては、契丹族の中にも少なからず漢語を解するいわばバイリンガルな人々が相当存在していたからであろう。さらには、文化の成熟度から観て、より重層かつ伝統的な中華文化が優勢であり、社会的制度のベースを占めていたり、社会の各種の複雑な概念などが言語化されていた点もあるかもしれない。

契丹（遼）の歴史を記した史書としては、正史である『遼史』があり、さらに『契丹国志』などの史書も存在するが、内容的には十分ではない点多々存在している点は否めない。

1980年代以降、中国各地では経済的發展や社会要因等を背景として、多くの文物が発見されるようになってきたが（中国地理紀行編集部，2003），契丹（遼）時代の墓誌も多く発見され、碑文などの石刻史料とともに出土文字史料の追加が相次いでいる。その結果、正史である『遼史』が記していない事実や、誤認していた事実などが徐々に明らかになってきている²。

また、ごくわずかながら、契丹語による石刻も見つかっており、現在までに確認されている契丹語の石刻のほとんどは墓誌である。なお、契丹語を記している契丹文字は未だ完全には解読されていない。ただ、不完全ながらも、解読された個所を観ると、多くの個所において漢語が借用されている実態が明らかとなった（西田，1982）。具体的には、官職名や封号・爵位の名称などはほとんど漢語名の借用であって、その発音をそのまま契丹文字で標記している。この点からも、当時の契丹人社会の中でも漢語が優勢であった点是否定できず、当時の支配階層の様相の一端を示す意味からも注目されている。

ところで、前項でも記したように、契丹（遼）時代の墓誌には、被葬者の社会的地位と墓誌の大きさ

第2表 契丹（遼）時代の墓誌における契丹文字文墓誌の形態と被葬者の出自に関する類型表（武田，2012より引用）

カテゴリーの様相	被葬者の出自の傾向	事例
A 漢文墓誌・契丹文字墓誌ともに蓋・碑身の二石ずつのセットの例	第1表のⅠ皇帝・Ⅱ皇后・Ⅲ皇太叔と妃のクラスにのみ見られる	道宗皇帝哀冊、道宗宣懿皇后哀冊、義和仁寿皇太叔祖・同妃
B 蓋陽に契丹文か漢文の題記があり、蓋陰は契丹文、碑身には漢文の墓誌がある例	表ⅠのⅣ皇親・有功の皇族と妃などのクラスの例、およびその子孫・親族など	耶律仁先、耶律宗教、耶律習涅（干越＝最高位の名譽職官・魯不古の子孫か？）、耶律智先（耶律仁先の弟だが、要職経験無し。）
C 配偶者のいずれかが契丹文字の墓誌である事例	これらのカテゴリーについては、現時点で明確な傾向は指摘しにくい。	耶律昌允（契丹大字）と妻蕭氏（漢字）、蕭興言（漢文）と妻の永寧郡公主墓誌（契丹大字）、耶律（韓）敵烈（契丹小字）と妻の蕭烏魯本（漢文）
D 契丹文字墓誌のみの場合の例		

には概ね相関関係があることが判明している。さらに、希少な契丹語墓誌は基本的には、支配階層である契丹人の中でも皇帝または極めて高位の皇族にしか見られないものであるもので、いわばその存在は被葬者のステイタスを示すひとつの要素ともなっている点では、他の中華王朝の墓誌の事例とは異なる点でもある（第2表）。

3-3. 出土文字史料の重要性と伝達媒体としての石

このように、契丹（遼）時代の墓誌が研究上において重要な史的価値を有しており、伝世史料では知られていない事実を明らかにしたり、従来の研究を更新ないしは補完する学術材料となっている。もちろん、これはあくまで一事例であり、他の時代・地域においても類似した事例は多々存在していよう。つまり、歴史学・考古学の研究全般において、石刻などの出土文字史料が果たす比重は年々高まっている。

また、伝達媒体の観点から見た場合、石刻史料の特質は以下の点があると思量する。

第一に、石に刻むという点において保存性に優れている点がある。もちろん、携帯・移動という観点からすると、石は極めて不利な媒体となるが、劣化

2 たとえば第8代の道宗皇帝の諱はも伝世史料では「洪基」とされていたが、実際には「弘基」であることが判明しており、また「弘」の字はその兄弟や従兄弟などの同じ輩行の人物にも使用されていることも、同様に確認されている。

や保存の観点では、紙媒体などに比べて大きなメリットがある。

第二に、多くの伝世史料は基本的には書写や再刊行といった行為を繰り返すことで、今日に至るまでその内容を伝えている。しかし、その書写や再刊行という過程において、オリジナルの内容の一部が誤記されたり記載に漏れたりするなどの人的なエラーが往々にして生じている。そうしたエラーが生じる確率はたとえ限定的であったとしても、史料記述の信憑性に与える影響は少なくない。よって、今日の歴史研究において、各種の版本テキストを見比べて字句の異同を確認するという史料校勘の作業が重要となっていることは、周知のとおりである。

これに対して、石刻は製作された際の内容がそのまま今日に伝えられているのであり、オリジナル内容そのものであるという点で基調であり、その重要性を改めて記しておきたい。

4. 墓誌文化の根底にあるもの－被葬者の顕彰と鎮魂、そして葬送者の自己意識－

こうした墓誌の実見を行うとともに、実際にそれが出土した墓の遺跡参観も行うなど各種調査を手掛けてきた筆者には、かねてからひとつの根本的な疑問をずっと持ち続けてきた。すなわち、そもそも有力者の墓は埋葬時には往々にして厳重な封印がなされており、特に皇帝陵では墓の周囲に巨石を配するなどの大規模工事をして、後世の盗掘対策をしている事例すらもある（北京市文物研究所 [編], 2006）。墓誌はそうした墓室の内部に遺体や副葬品とともに埋納されていくのであるが、ここに記した文はいったい誰に読まれることを想定して製作されていたのか、という問題である。

既に、後世に盗掘されることを想定しそれを前提として、墓誌はその墓の主を示すために入れられていたという考察も、あるいは成立するのかもしれない。しかしながら、盗掘を前提とした葬送儀礼・文化というのは、余りに奇妙な想定に思えてしまう。

このように考えると、墓誌に生前の被葬者の各種の事績を克明に記録して、被葬者の墓室に副葬品とともに埋納して厳重に封印する、という行為から見て取れるのは、ひとつには被葬者の顕彰であり、ま

た鎮魂の目的のためであろう。特に、墓誌の末尾には被葬者を悼む銘という韻文が記されている点からも、そうした想定は妥当性があると思われる。

さらにもうひとつの想定としては、墓誌は葬送に立ち会う親族や、生前の被葬者と関係・交友が深かった人物らが埋納する予定の墓誌の刻文を読み、改めて被葬者故人を偲ぶためのものではなかったか。だとすれば、ここに記された内容は、残された人々が故人の存在を振り返りつつ、その際の自己のおかれた地位・立場をも再認識する目的で作成されたではないか、という想定も成立すると考えている。

ふりかえって観れば、こうした墓誌の文化が大きく展開して、形態が定まった時期は南北朝期であったが、それは中華世界が分裂し政治的には混乱していた時期でもある。この時期以降は、中華社会ではいわゆる古来からの地縁・血縁に基づいた共同体的な社会基盤が喪失し、周辺から異民族が流入して、支配階層や為政者になる時代へと変化した。多様な社会となった一方で、新たな為政者はその正統性を創り出して提示する必要が生じた（妹尾, 1999）。

隋から唐に至っては、国際色の豊かな社会が成立したとされるが、そうした社会において、自己が何者であるのかという人々の心的内面における帰属意識はかえって高まったのではないだろうか。

また、隋・唐の皇族が鮮卑系遊牧民の伝統や系譜を引いており、社会において自己の位置づけには相当神経を使っていたことは、様々な史実からも明らかである³。それに続いて成立した契丹（遼）では、支配者として君臨した契丹人の皇帝や貴族は、実際に草原で遊牧生活を送りつつも、中華世界で興亡した五代や北宋といった諸国家と外交交渉を重ねるなどして、最終的には和平条約を締結し、成熟した多国間での国際関係を維持していくことになる（古松, 2020）。ここでも、他の国との外交や儀礼においては、常に自己の意識が絶えず問われることになったのかもしれない。

あくまで憶測ではあるが、墓誌という文化が発展

3 唐の太宗が、天下の名族のランク付けを目的として『氏族志』の編纂を命じたところ、当初の案では太宗の一族は皇族でありながら第3位に序せられたので、太宗は作りなおしを命じたという故事が知られている。この事件の経緯の詳細については、森部（2023）に詳しい。

して一定の原型が現れた時代、またそれが隆盛して定着した時代、そして被葬者の生前の地位と墓誌大きさが制度的に整備された時代が、まさに北魏であったり、隋・唐であったり、契丹（遼）であったりするのを観るにつけ、墓誌の製作とそれを墓中に埋納するという一連の文化の根底には、これらの時代に生きた支配階層や有力者の潜在的な志向や意識が垣間見られるように思えてならない。

5. 小結

以上、墓誌を埋納する文化について、これまでに筆者が得た印象や所見から、つらつらと想定ばかりを列ねてきた。小文の内容は、あくまで根拠の乏しい内容から、さらに想定や憶測を重ねていたものであるので、また本研究班の諸学兄・学姉らのご指正を心して待ちたく思う。

文献

- 韓 茂莉 (2006) : 『草原と田園 一遼金時期西遼河流域農業と環境一』。176 ページ, 三聯書店, 北京。
 祝 賀 (2010) : 曹操高陵考古発掘主要収獲。中原文物, 2010 年 4 期, 3-7。
 妹尾達彦 (1999) : 中華の分裂と再生。『中華の分裂と再

生 3-13 世紀』(岩波講座 世界歴史 9), 3-82, 岩波書店, 東京。

- 武田和哉 (2012) : 契丹文字墓誌の姿からわかること 一契丹国時代墓誌の様式を探る一。Field+ (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所), no. 8, 8-9。
 中国地理紀行編集部 (2003) : 特集 失われた王朝契丹。中国地理紀行, Vol. 14, 12-43。
 陳 光唐 (1984) : 河北大名縣發現何弘敬墓誌。考古, 1984 年 4 期, 721-725。
 中田勇次郎 (1975) : 『中国墓誌精華 一解説 釈文・解題一』。312 ページ, 中央公論社, 東京。
 西田龍雄 (1982) : 契丹文字解読の新展開。『アジアの未解読文字』, 157-202, 大修館書店, 東京。(のち 2002 年に『アジア古代文字の解読』〔中公文庫〕で復刊)
 古松崇志 (2020) : 『草原の制覇 一だモンゴルまで一』(岩波新書)。254 ページ, 岩波書店, 東京。
 北京市文物研究所[編] (2006) : 『北京金代皇陵』。344 ページ, 文物出版社, 北京。
 森部 豊 (2023) : 『唐 一東ユーラシアの大帝国一』(中公新書)。379 ページ, 中央公論新社, 東京。
 劉 慶柱 (2010) : 曹操高陵の考古発現與研究。中原文物, 2010 年 4 期, 8-12。

